

## “Is it possible dat I sould love de enemy of France?”

——『ヘンリー五世』第5幕第2場における異文化コンフリクト——

浜 名 恵 美

### I. 本論の目的

本論は、シェイクスピア演劇における異文化コンフリクト理解のための分析モデル構築プロジェクトの一環である<sup>1</sup>。プロジェクトの目標のひとつは、シェイクスピア研究がより積極的に異文化理解教育に資するための土台を築くことである。ここでは、シェイクスピアの英国史劇の中から『ヘンリー五世』（推定執筆年1598-99年頃）をとりあげ、第5幕第2場における異文化コンフリクトを分析する。

異文化コミュニケーション研究の主要目的のひとつは、異文化コンフリクトを管理・解決することである。コンフリクト管理・解決には多数の理論モデルがあるが、本論では、ステラ・ティントゥーミーとジョン・G・オーツェルが、自分たち自身の諸理論と他の多数の学者による理論を総合して提唱している「文化に基づく状況モデル（culture-based situational model）<sup>2</sup>」（発展中）を参照枠とする。シェイクスピア演劇でも異文化コンフリクトは重要要素だが、最終的には相応の修正を施す必要があるとはいえ、解決に劣らず過程を特に文化の諸特徴に焦点をあわせて多角的に分析するためには、「文化に基づく状況モデル」が適している。

本論では『ヘンリー五世』の第5幕第2場におけるイングランド王ヘンリーのフランス王女キャサリンへの求愛場面に見られる異文化コンフリクトの管理・解決を分析することにする。ヘンリー五世のフランス征服の野心から生じた英仏戦争という国際紛争は、武力によって決着がつく——イギリスがアジンコートでまさに劇的に勝利する。しかし、このような勝敗がつくことは、異文化コンフリクト管理・解決研究の立場からは、望ましいものではない。異文化コンフリクト管理・解決研究の立場から注目されるのは、両国が合意に達する最終場面である。他の作品、例えば、『恋の骨折り損』などと重複する点もあるが、『ヘンリー五世』の最終場面（第5幕第2場）は表面上<勝-勝>の

理想的な状況になっている。異文化コンフリクト管理・解決の立場からは、＜勝一勝＞になっているのが好ましく、何度でも分析するに値する。

## II. 本論

### 1. ヘンリー五世とフランス王女キャサリンの異文化コンフリクトの特色

#### 1) 両者の異文化コンフリクトの概観

『ヘンリー五世』は、R. ホリンシェッドの『年代記』（1587年版）、E. ホールの『年代記』（1548年）、作者不詳の歴史劇『ヘンリー五世の名高い戦勝』（1594年出版登録）などを材源とし、彼がなしたげたフランス征服を描いた5幕の芝居である。しかし、ここでは4幕までの筋の展開を省略して、第5幕第2場だけを扱うことにする<sup>4</sup>。

第5幕第2場の舞台はフランスのトロワにおけるフランス王宮の一室である。フランス王とヘンリーとの間で和平条約の交渉が行われる。ヘンリーは和平条約の第一としてフランスの王女キャサリンとの結婚を要求する。そこで、彼と王女と侍女アリスを残して全員が退場してから、ヘンリーは彼女に無骨な求愛をおこなう。（すでに第3幕第4場で英語の学習をしている喜劇の場面が挿入されていたのだが）キャサリンの英語力が十分でないこともあり、英語、フランス語、二つの言語の混成語などを使って、真剣なのだが時に非常に滑稽にも聞こえる台詞のやりとりがなされる。（ちなみに、この場面は、イングランド王とフランス王女という高位の者同士の対話であるが、喜劇の効果高めることになる散文で書かれている。）征服した国の王であり、男性として求愛する側のヘンリーの方が積極的であり、台詞が多い。やがて、ついにキャサリンも父親の承諾を条件に求愛を受け入れ、ここにヘンリーがフランス王位の次期継承者となることが確定する。条約も無事締結され、ヘンリーが近い将来におけるイングランド＝フランス二重王国の誕生を宣言する。

この場面における戦勝国の王ヘンリーと敗戦国の王女キャサリンの関係は、もちろん、対等なものではありえない。ヘンリーは、屈辱感、恥じらい、不安などで一杯のキャサリンをあの手この手で熱心に求愛するが、英仏和平条約の重要項目として二人の結婚があげられており、この結婚に関して両国はすでに合意に達しているも同然である。彼にとって、彼女は実際には戦利品のようなものである。他方、キャサリンも、祖国、両親、自分自身の生命を救うためにも、この政略結婚に同意するほかないと覚悟している。

つまり、第5幕第2場の求愛場面は、イングランド王とフランス王女との間の一種の異文化コンフリクトの様相を呈するのだが、どれほど紛糾しようと、最終的には和解に達すると予測がつく。

ヘンリーの台詞には、他の場面における威嚇的な台詞を想起させるような、強権的な部分もある。それでも、多少、この場面を好意的に見ることもできないわけではない。ヘンリーが優位に立っているのも、これが政略結婚であることも明白だが、それでも彼がキャサリンに好意をもち、懸命に説得しているのも事実である。またキャサリンにしても、敵国の王とはいえ、彼に好意をもちつつあるように見える。アーデン版（第3シリーズ）の編者T.W. クレイクが第5幕第2場の求愛場面の巧妙な書き方に注目しているように、実際、深刻な戦闘場面の連続の後で第5幕第2場の喜劇的場面にしたと、多くの観客は安堵するはずである。征服者からの拒絶できない求愛の場面に現代の民主的社會に暮らしている多くの観客や読者がどこまで共感できるかは別にして、第5幕第2場の求愛場面のヘンリーとキャサリンのやりとりは、演劇的にも異文化コンフリクト管理・解決の立場からも興味深いものがある。

ここから、第5幕第2場の求愛——異文化コンフリクトの変奏——を概観しておく。まず、この場面の台詞の分配が特異であることを理解しておかねばならない。第5幕第2場の求愛場面そのものの台詞は98-297行で、合計200行である。しかし、この場面には、英語の通訳役をつとめるキャサリンの侍女アリスを含めて3人がいるが、200行の台詞の大半はフランスを征服したヘンリー五世が話している。さらに、キャサリンの英語力は非常に限られており、彼女はフランス語、（誤りのある）英語、または二つの言語を混ぜて話す<sup>9</sup>。

表1：第5幕第2場の台詞の割り当て

ヘンリー	167行		
キャサリン	26行	内訳	
		フランス語の台詞	13行
		英語の台詞	8行
		英語とフランス語の混成の台詞	5行
アリス	7行		
合計	200行		

要するに、80%以上をヘンリーが話している。ただし、彼が一方向的に話しているというわけではなく、彼の長い求婚の台詞に対して、キャサリンが1から数行の応答をする。対話ではあるのだが、二人の話す分量が非常に違う。簡単に言えば、ヘンリーの方がキャサリンの6倍以上話している。さらに、キャサリンは、フランス語で話すことの方が多い。(つまり、言語の点では、明白に異文化コミュニケーションの例となっている。)

求愛場面の初期では、双方とも緊張気味である。ヘンリーの形式ばった挨拶と求愛に対して、キャサリンは、英語が話せないと(誤りのある)英語で述べる。“Your majesty shall mock at me; I cannot/speak your England.” 5.2. 102-3) ヘンリーは彼女の不安と緊張をやわらげるために、早速「ケイト」(107行)と愛称で呼びかける——以後、たびたびケイトと呼びかける。さらに、同様に、人称代名詞を一般的な二人称複数形“you”から親しい者に使う二人称単数形“thou”に変える<sup>6</sup>。ヘンリーは、武人であり、洗練された宮廷人ではないので、当時はイギリスよりも洗練されたフランス宮廷で育った王女の前で、非常に緊張している。しかも、フランスの王女にとって、イギリス王ヘンリーは祖国を征服した憎い王である。これらの事情から、ヘンリーは、当初、非常に慇懃、形式的に話しかけるが、キャサリンが英語を完全には理解できないこともあり、くだけた話し方に切り替える。ヘンリーのコミュニケーション・スタイルの切り替えの早さに彼の才覚の片鱗がうかがえる。(ただし、フランス人のキャサリン(カトリーヌ)が、勝手に英語の愛称ケイトと呼びかけられて快いかどうかは不明である。)

キャサリンは、初期には特に用心深く、フランス語を使うことが多い。ヘンリーは、彼女の不安と限られた英語力に配慮して、彼女にやや率直すぎるくらいに簡潔に求愛する。だが、彼女は彼の求愛をすぐには受け入れない。(なお、この場面全体をとおして、彼女が英語をどのくらい理解しているのか判然としない。基本的にあまり理解していないと想定されているらしい。)その直後、ヘンリーは、武骨とはいえ、誠実で熱烈な求愛の長い台詞(134-73行)を述べる。キャサリンは、この求愛の台詞には心を動かされたと見えて、次のように述べる。(なお、ここで疑問がまた起こる。キャサリンが今度はヘンリーの台詞を理解しているとすれば、彼女の英語力は高いことになる。ただし、あまり理解できなくてもヘンリーの様子などから、内容の見当はつくはずだともいえるし、舞台上ではそばにアリスがいるので耳元で通訳していれば理解できることになる。)

Is it possible dat I sould love de enemy of France? (5.2.174-75)  
(私、フランスの敵を愛すること、可能ですか?)

これは、この場面を通して比較的寡黙なキャサリンが初めて明かす本心である。キリスト教は汝の敵を愛せと教える。だが、戦争で殺しあった敵と味方が暴力を許し、愛することが本当にできるのか？ 聖者ではない凡人がそこまで寛容になれるのか？ キャサリンの台詞は、重大な疑問であると同時に、求愛者ヘンリーへの鋭い反論でもある。この台詞こそ、この場面の異文化コンフリクトの核心である。血のつながりはあるとはいえ異なる国と文化に属する者同士が、戦争によってもたらされた憎悪を心に抱いたまま、どうやって本当に和解できるのか。キャサリンの疑問は、現代社会にあっても意味を失っていない根本的疑問である。このコンフリクトをどう解決するのか。

キャサリンの疑問に対して、ヘンリーは次のように応じる。

No; it is not possible you should love the  
enemy of France, Kate; but, in loving me, you  
should love the friend of France, for I love  
France so well that I will not part with a village  
of it; I will have it all mine: and Kate, when  
France is mine and I am yours, then yours is  
France and you are mine. (5.2.176-82)

(いや、ケイト、きみがフランスの敵を愛することは不可能だ。だが、私を愛することはフランスの友人を愛することだ、私はフランスを愛するあまり、その村一つでも手放す気はなく、すべてを私のものになりたいと思っているのだから。そして、ケイト、フランスが私のものになり、私がきみのものになれば、フランスはきみのものになり、きみは私のものになるのだ。)

ここでのヘンリーの論理は注目に値する。まず、フランス王女キャサリンが、フランスを征服した敵であるイングランド王ヘンリーを愛することは不可能であると、彼は正直に認める。その上で、フランスを征服した自分の所有欲を謝罪せず、愛するからこそ征服したのであり今後とも所有し続けたいと主張する。そして、夫婦は一心同体、フランスはヘンリーもものであり、ヘンリーがキャ

サリンのものならば、結局フランスはキャサリンのものであり、キャサリンはヘンリーのものであると、相互利益を強調する。二人に関する限り、二人とも勝者になれるのだという表面上は<勝-勝>指向の論理を展開する。もちろん、厳密には、征服者と被征服者の間で平等な相互利益があるはずがない。ヘンリーの論理には強引なところがある。とはいえ、彼がキャサリンの重大な反論に対して、まず正直に返答してから、すぐに抜け目ない論理を展開し、窮地をとりあえず脱するところは、リーダーとしての危機管理能力を発揮していると言ってもよい。ただし、皮肉にも、ヘンリーの論理をキャサリンは理解できないと言う。

そこで次にヘンリーが、臨機応変にフランス語を話す。すると、キャサリンは自分の英語より彼のフランス語の方が上手だと述べる。フランス語の巧拙は別にして、彼が苦心して彼女の母語であるフランス語を話したことに好感をもつらしい<sup>7</sup>。そこで、ヘンリーは、「きみはわたしを愛することはできないか」(202行)と改めて問う。彼女は、「答えられない」(203行)と言うが、彼女がヘンリーに好意を抱きつつあることは(少なくとも彼には)歴然としている。そこで、彼女の好意を察知したヘンリーが、さらに武人らしく直截な求婚を行う(204-220行)。ここでは英仏の血を半々に受け継いだ男の子を、コンスタンチノーブルに遠征してトルコ王を捕虜にするような男の子をつくろうではないかと、ヘンリーが興奮気味に提案するが、キャサリンはヘンリーの言っていることがわからない(ふりをする)。(彼女は、恥じらいからヘンリーの英語がわからないふりをしているのか、本当にわからないのか、ここでも観客にしても読者にしてもよくわからない。芝居としては、そのあいまいさが軽い苛立ちを伴う独特の面白さをもたらしている。)

ヘンリーは、彼女の恥じらいや戸惑いなどにはおかまいなしに、子作りの話に熱中する。フランス語も交える。すると、キャサリンは、王がだますのではないかという不安を述べて、相変わらず求愛を受け入れる返事をせず、じらしにかかる。そこで、ついにヘンリーが忍耐の限界に達する。231-260行の長い台詞は、熱烈な求愛であると同時に、熱意と誠意を尽くして十分に求愛したのだから、もう私の言いなりになれ、もう求愛ゲームは終わりだということを暗示している。彼らの結婚に関しては、すでにフランス王との間で合意に達しているも同然で、キャサリンの合意は形式的に必要なだけなので、ついにヘンリーは求婚ゲームに決着をつけるとも言える。“Put off your maiden blushes; …take me by the hand, and say, “ Harry of England, I am thine” …I

will tell thee aloud, " England is thine, Ireland is thine, France is thine, and Henry Plantagenet is thine." …wilt thou have me?" (乙女の恥じらいなど無用だ、(中略)、私の手をとってこう言うのだ、『イングランドのハリー、私はあなたのものです』と。(中略)私は声を大にして言うだろう、『イングランドはきみのものだ、アイルランドもきみのものだ、フランスきみのものだ、そしてこのヘンリー・プランタジネットはきみのものだ』と。(中略)私と結婚してくれるか?) 表面上は<勝-勝>指向を強調しているが、半ばは威嚇的でもあるヘンリーに、ついにキャサリンは従順になり、父の同意が得られれば求婚に応じると答える。フランス王はいいと言うに決まっているとヘンリーが答えると、キャサリンもついに観念して合意する。

表面上は、キャサリンはヘンリーのものになり、ヘンリーはキャサリンのものとなる。双方が相手を得る。実際には、征服であり、キャサリンは戦利品のようなものなのだが、レトリックだとしても<勝-勝>指向が強調されることはやはり重要であろう。異文化コンフリクトを解決し、よい結果を得るためには、双方の面子をたてる必要がある。

その後、キスに関する習慣・作法をめぐる異文化コンフリクトが生じる。合意の印として、ヘンリーがキャサリンの手にキスをしようとする時、上位の者が劣位の者に頭を下げてキスをするのはとんでもないと、彼女が遠慮する。ヘンリーに敬意を示しているキャサリンからすれば、むしろ彼女の方が彼にキスをするのが作法だということである。ところが、結局、ヘンリーは彼女の唇にキスしてしまう。彼は二人で一国の習慣などに縛られずに新しい風俗習慣をつくらうなどと言って強引にキスしてしまうが、この場面は問題をはらむ。この場面は、演出によるとしても、単純に喜劇的なものとするのはやや難しく、現代の舞台では、征服者の強引さが目立つ恐れがあるだろう。

## 2) 両者の異文化コンフリクト分析

本論では、『ヘンリー五世』第5幕第2場求愛場面における異文化コンフリクトを、文化に基づく状況モデルに準拠して詳細に分析することも図解することもしない。理由は、結局のところ求愛にかかわるジェンダーのコンフリクトに集中するので、文化に基づく状況モデルに準拠して詳細に分析するまでもないからである。

この作品における異文化コンフリクトは、戦勝国イングランドのヘンリー五世と敗戦国フランスの王女キャサリンとの求愛に関するコンフリクトである。

ヘンリーは熱烈に求愛するが、キャサリンは、最終的に同意するほかないと認識しながらも、簡単には受け入れない。しかし、言語の障害、キャサリンの疑問や不安などのために容易に解決されない両者のコンフリクトは、最後には解決されると言える。

本論で注目したいのは、冒頭部でも述べたように、このコンフリクトが<勝-勝>の態度で解決されること——それがどれほど問題をはらんだものであっても——であり、それがどのように実現されているかを次に分析することにする。

### 3) 両者の異文化コンフリクトはどのように「解決」されたのか？

「文化に基づいた状況モデル」によれば異文化コンフリクト管理・解決能力には、4つの基準がある。適切性、有効性、満足、生産性である。適切なコンフリクト行動は、コンフリクトを支配している基本的な価値、規範、社会ルール、期待、スクリプト（手続き）を理解することを通して評価される。有効性とは、当事者たちがコンフリクトの多数の意味に正確に耳を傾け、互いに望ましい目標を達成したかどうかである。コンフリクト相互作用を満足のいくものにするためには、コンフリクト交渉過程自体で交換されるメッセージの使用法をとりまく文化的前提を理解する必要がある。生産性とは、コンフリクトの問題を解決するための新しい概念、新しい計画、新しい弾み（momentum）、新しい方向の産出など、成果の諸要素に密接に関係する。生産的なコンフリクトでは、双方がコンフリクト過程に互いに影響を及ぼしたと感じ、双方がコンフリクトの結果として何かを得たと考える。非生産的なコンフリクトの議論がコンフリクトに対して<勝-負>（から<負-負>）指向を反映しているのに対して、生産的なコンフリクトの議論は<勝-勝>指向を反映している（表2）。

表2：<勝-負>対<勝-勝>コンフリクト指向：中心の特徴

	<勝-負>コンフリクト指向	<勝-勝>コンフリクト指向
①	文化的差異の無視	文化的差異の尊重
②	アイデンティティの格下げ	アイデンティティの評価
③	<勝-負>から<負-負>の態度	<勝-勝>の協調的態度
④	コンフリクトのコンテクストに鈍感	コンフリクトのコンテクストに敏感
⑤	自己利益になるコンフリクト目標の押しつけ	相互利益になるコンフリクト目標の発見



⑥	自己利益になるコンフリクトの立場の主張と弁護	より深いコンフリクトの必要と前提の発見
⑦	競争的または受動的-攻撃的なコンフリクトの行動様式	協調的またはギヴ・アンド・テイクの妥協的な行動様式
⑧	気配りに欠けた態度に専念	気配りのあるコンフリクト管理・解決技能の実践
⑨	コンフリクト姿勢の堅持	進んで変えようという姿勢

異文化コンフリクト管理・解決能力のある者とは、コンフリクトの意味を適切に、効果的に管理し、同時に、そのコンフリクトの関係性をより高度の満足と生産性のあるものに変容させることができる者のことである。

『ヘンリー五世』第5幕第2場における異文化コンフリクトとは、イングランド王ヘンリーとフランス王女キャサリンの結婚をめぐるものであり、英仏戦争の勝者と敗者との間で、決着がついているのも同然である。この結婚は私人と私人とのものではなく公人と公人とのものであり、個人的な好き嫌いがまったく考慮されないことはないとしても、あくまで国益が優先される。キャサリンは、これが政略結婚であり、彼女の置かれた立場では拒否することはできないと十二分に承知している。

とはいえ、別の問題が残る。キャサリンは敗戦国の王女として屈辱感や怒りを胸に抱いている上に、英語力が十分でないこともあって比較的寡黙であり、基本的に受動的である。逆に、ヘンリーは戦勝国の王として圧倒的に優位な立場にあるが、外交上も儀礼上も、上品に振舞わねばならないし、近い将来結婚して世継ぎを生んでもらうためにも、キャサリンにすぐ愛することはむりだとしても彼に好意はもってもらいたいという姿勢でいる。そのために、結婚のコンフリクトそのものの強度は低いのだが、それを首尾よく解決しようと全力を尽くす。つまり、彼は、すでに事実としては勝ちと負けの決着がついているコンフリクトを解決するために、＜勝—勝＞指向に転換してみせる。ここで、特にヘンリーの異文化コンフリクト管理・解決能力が高いとわかる。

ヘンリーの＜勝—勝＞指向への転換作戦によって、ヘンリー自身とキャサリンの相互の態度がどうなっているのかを分析してみると以下のようになる（表3）。

表3：＜勝－負＞対＜勝－勝＞コンフリクト指向：中心の特徴

	＜勝－勝＞コンフリクト指向	ヘンリー	キャサリン
①	文化的差異の尊重	+-	?
②	アイデンティティの評価	+	+
③	＜勝－勝＞の協調的態度	+	?
④	コンフリクトのコンテクストに敏感	+	+
⑤	相互利益になるコンフリクト目標の発見	(+)	?
⑥	より深いコンフリクトの必要と前提の発見	(+)	?
⑦	協調的またはギヴ・アンド・テイクの妥協的な行動様式	(+)	?
⑧	気配りのあるコンフリクト管理・解決技能の実践	(+)	?
⑨	進んで変えようという姿勢	+	?

ヘンリーとキャサリンのそれぞれの項目における評価を+, (+), -で示した。ヘンリーの場合、多くの項目で(+)となってしまうのは、彼の言動の多くに留保がつくからである。コンフリクトを解決するために積極的な発言をするのだが、表面的なレトリックであることも少なくなく、どこまで誠意のある言動であるのか判断不能である。他方、キャサリンの場合には、ほとんどの項目が「?」になる。実際、彼女の真意はよくわからない。

ヘンリーとキャサリンの＜勝－勝＞コンフリクト指向の中心の特徴に関して、双方は以下のようになる。

- ① 文化的差異の尊重：ヘンリーは、最後のキスの場面で、フランスの習慣を無視して強引にキスするので+-。キャサリンはヘンリーのイングランド的作法に戸惑うが、勝者である相手の文化を尊重するつもりであろう。
- ② アイデンティティの評価：ヘンリーとキャサリンは相互に高く評価しあう。特に、最初からヘンリーはキャサリンを認めている。キャサリンの方は多少微妙である。常套的とはいえ、最初は、ヘンリーの求愛に関して、男は嘘つきだという不信を表明するが、徐々に好意を抱いていくようにも見える。(多くの観客や読者はここでのヘンリーの熱烈な求愛の台詞は長すぎると感じるはずだが、敵国の王との政略結婚に同意しなければならぬ王女の立場にたてば、これでも短いくらいであろう。)

- ③ <勝-勝>の協調的態度：特にヘンリーが、<勝-勝>の協調的態度をとるように仕向ける点が重大である。
- しかし、以下の点にも留意すべきであろう。寡黙で英語の苦手なキャサリンの心申はうかがいしれないものがあるとはいえ、彼女が毅然とした態度をとる場面がひとつある。それが本論のタイトルにもした台詞、<敵を愛することは可能か？>という難問であり、彼女のヘンリーに対する挑戦である。この難問に対して、ヘンリーは、<勝-勝>指向の見事な論理を展開するのだが、彼女はわからないと答える。仮に彼女はその論理を理解したとしても、心底から受け入れているわけではない。（ヘンリーがフランスの摂政と王位継承者になるという条件なのだから、当然であろう。）
- ④ コンフリクトのコンテクストに敏感：ヘンリーとキャサリンの双方が二人の結婚に英仏の和平がかかっていると深く認識している。
- ⑤ 相互利益になるコンフリクト目標の発見：ヘンリーは、（表面的だとしても）この点で際立っている。キャサリンの真意はわからない。
- ⑥ より深いコンフリクトの必要と前提の発見：⑤とほぼ同様である。
- ⑦ 協調的・妥協的な行動様式：ヘンリーは協調的・妥協的な行動様式をとるようにするが、最後にキャサリンに強引にキスしてしまうので減点される。キャサリンの真意はわからない。
- ⑧ 気配りのあるコンフリクト管理・解決技能の実践：ヘンリーは気配りのあるコンフリクト管理・解決技能を実践するが、最後にキャサリンに強引にキスしてしまうので減点。キャサリンは評価しがたい。
- ⑨ 進んで変えようという姿勢：ヘンリーは積極的に評価できる。キャサリンは評価しがたい。

### Ⅲ. 結論

本論では、『ヘンリー五世』第5幕第2場のイングランド王ヘンリーによるフランス王女キャサリンへの求愛をめぐる異文化コンフリクトをとりあげ、特にヘンリーが<勝-勝>指向にすることがコンフリクトの「解決」にとって重大であることを明らかにした。英仏間戦争とそれに続く和平条約締結という国際紛争の特殊な状況である。しかし、異文化コンフリクト管理・解決の立場から意義深いことはある。特殊な事例であるとしても、ヘンリー五世のリーダーシップは、異文化コンフリクト管理・解決論の立場から——ヘンリーは<勝-勝>指向にするが、相手のキャサリンが本当に受容したのかどうかはついにわからないので——相当の留保はつくものの、高く評価されるべきだろう。同時に、依然として世界各地で民族紛争が続いている今日、本論のタイトルにした「敵を愛することができるのか」という特に敗者キャサリンの疑問の意義はますます重いものがあると言える。

### 注

- 1 浜名恵美「シェイクスピアと異文化コミュニケーション:序説」,『筑波英学展望』第22号,2003年3月,pp.71-83;「シェイクスピアと異文化コミュニケーション:Work in Progress」,『Shakespeare News』,2003年12月,Vol.43, No.2, p.14;「『ヴェニスの商人』における異文化コンフリクトとその「解決」——シェイクスピアと異文化コミュニケーション:その1」,『言語文化論集』(筑波大学)第64号,2003年12月25日,pp.57-80;「“Friends, Romans, countrymen, lend me your ears...”——『ジュリアス・シーザー』第3幕第2場におけるコンフリクトとその「解決」」,『Shakespeare News』,2004年9月,Vol.44, No.1, pp.9-17;「“No, to be once in doubt, / Is once to be resolv'd.”——『オセロー』第3幕第3場における異文化コンフリクト分析」,『外国語教育論集』(筑波大学外国語センター)第27号,2005年3月,pp.29-37;「衡平(equity)とは何か?—『尺には尺を』第2幕第2場におけるコンフリクト規範の差異」,『文藝言語研究 文藝篇48』(筑波大学)2005年10月31日,pp.1-14。なお、本論は、平成16-18年度日本学術振興会科学研究費補助金交付,研究課題「シェイクスピア演劇における異文化コンフリクト理解のための分析モデル構築」(研究種目:基盤C(2),課題番号:16520131,研究代表者:浜名恵美)のための考察の一環である。
- 2 Stella Ting-Toomey and John G. Oetzel, *Managing Intercultural Conflict Effectively* (Thousand Oaks, CA: Sage, 2001), pp.27-62.

シェイクスピア演劇における異文化コンフリクト理解のための分析モデル構築をめざす立場から、これまでのシェイクスピア作品の分析の結果から明らか

になってきた「文化に基づく状況モデル」の特色と限界のいくつかを以下に記しておくことにしたい。

第一に、シェイクスピア演劇には戦争（究極のコンフリクト）が多く、戦争を効果的に分析したかったが、異文化コンフリクトの分析モデルでは限界があると言わざるをえない。対外戦争は国際紛争であり、異文化コンフリクトの側面はあるが、それよりも領土拡張などの政治的・軍事的対立の側面が強い。さらに、戦争の決着は、その過程でさまざまな交渉・調停が行われるとしても、結局は軍事的なものであろう。つまり、基本的に、コミュニケーション・スキルよりも軍事力および作戦の優劣などによって決まるだろう。戦争に関しては、マクロの国際紛争モデルを適用することが必要であろう。異文化コンフリクト管理・解決理論は、国際ビジネス紛争などには適用できるし、戦争の場合でも適用可能であるとしても、一定の範囲内にとどまる。

第二に、ローマ史劇『ジュリアス・シーザー』がシーザーの暗殺と内乱を描いた作品であるのに対して、『ヘンリー五世』は英仏戦争を扱った作品である。したがって、同一文化内、あるいは類似した文化内の対立の場合では、ほとんど差が見つからない項目に関して、この作品では差が見つかるのではないかと期待した。例えば、コンフリクト規範に関して、特に戦場という緊張した状況では、英仏間に衡平規範と共同体規範の対立が見出せる場面があるのではないかと期待したのだが、残念ながら、この抽出は断念せざるをえなかった。

現時点では、『尺には尺を』では法規範と衡平規範の対立を抽出できたが、シェイクスピア演劇に文化に基づく状況モデルの衡平規範と共同体規範の対立を適用することは難しいと考えるほかない。なぜなら、イギリス、フランス、イタリアなど複数の文化が扱われていても、それらはすべて基本的に個人主義文化とされる西洋に属するからである。もちろん、例えば、当時のイングランドの村落共同体などでは、共同体規範があったと推測されるが、シェイクスピア演劇の中で共同体規範そのもの、さらに共同体規範と衡平規範が衝突する興味深い場面はなかなか見つからない。

第三に、非常に重大なことであるが、集団の和や面子を重んじるという共同体規範の特色は、個人間の葛藤を中心とする近代西洋演劇にとって中心的なことではないということである。例えば、近代化・西洋化の進んだ現代日本の場合でさえ、人間の成長とは共同体規範（協調性）を身につけることとされていると言えようが、西洋では人間の成長とは第一に個を確立させることであろう。言うまでもなく、西洋と言っても、宗教・民族・言語などを異にする、多くの国々と文化があり、西洋諸国の中でも、個人主義の強い国から集合主義が比較的強い国、衡平規範の強い国から共同体規範の強い国まで多様ではある。しかし、現代と比較して物理的にあらゆる点で制約のあった時代に制作されたシェイクスピア演劇は、そうした差異を描き分けているわけではない。

これに関連して、興味深いシェイクスピアの異文化プロダクションの例をひとつだけあげておく。『ク・ナウカで夢幻的な『オセロー』』（原作：シェイクスピア、謡曲台本：平川祐弘、演出：宮城聡）である。ク・ナウカは、1990年、演出家・宮城聡を中心に結成され、一つの役を<語る>俳優と<動く>俳優の

二人一役で演じる独自の方法で古今東西の戯曲を上演し、海外でも注目されている若手劇団である。『ク・ナウカで夢幻的な『オセロー』』は、2005年11月1日から13日まで、東京国立博物館の日本庭園の特設能舞台——蓮の花の咲く池の上に特別に設けられたもので夢幻能に最適の舞台——で上演された。

夢幻能では、名所を訪れた旅人（ワキ）の夢の中にシテ（神や霊）が登場し、その地にまつわる物語や身の上を語るという形式をとる。『ク・ナウカで夢幻的な『オセロー』』では、ヴェネツィアを訪れたワキの僧侶の夢の中にシテであるデズデモーナの亡霊が現れ、最愛の夫オセローに殺害されることになった身の上を語り、ついに蓮が象徴する浄土に静かに旅立っていく。シテは幽玄に消えるのだが、その姿を、舞台上の役者や（西洋の打楽器や日本の笙などを使った音楽を奏でる）演奏者も観客も、深い感動をおぼえながら、むしろ晴れやかに見送ることになる。

演出家の宮城聡は、上演プログラムの中で、この作品について次のように述べている。夢幻能には、西洋的な個人と個人の関係がない。近代以降では、結局作者という人間の中にある世界が開陳されるにすぎない。しかし近代以前の劇作家であれば、「個人」という考え方がない時代では、たとえば「村人」というような、コミュニティの構成員という集合があり、そこに所属している語り手が「村人」全体の蛇口ようになってしゃべることが不可能ではなかった。ところが近代になると個人というものが枠組みとして出てきて、芸術は個人というもののの中に閉じ込められてしまった。ただし、現代劇と能のあり方には似ているところがある。夢幻能の主人公は、現代人と同じように、極度に孤独な人間たちである。ただ一方、能は、観客まで含めて考えると、やはりコミュニティが全体で行っている鎮魂の儀式であり、自分たちのコミュニティをことほぐためのマツリである。近代以降の演劇にはない能の重要な機能は、「孤独の救済」のための演劇であり、（能には）孤独の極からその救済へのダイナミズムが内在している。（＜演出家宮城聡 作品を語る＞）

こうして、シェイクスピアが代表する初期近代西洋演劇と能という日本の古典演劇とが大胆かつ繊細に融合された異文化プロダクションが生み出された。この実験は成功したのだろうか？ 明らかに、非常に洗練された舞台であり、演技、舞、歌、音楽なども相当の訓練をつんだ役者たちが演じた高度なものと言える。東西演劇の融合は相当の成功を取めたと言っただけだが、疑問も残る。西洋の個人と個人との対立から生じた悲劇『オセロー』が、そうした対立に基づかない日本の能の形式の中に移植された。妻を溺愛するがゆえに嫉妬し殺害するオセローや殺害されるデズデモーナの個人の悲劇が、最終的には能の共同体全体で行われる鎮魂の儀式によって包み込まれる。『ク・ナウカで夢幻的な『オセロー』』は、西洋的悲劇ではなくなる。そこでは個人の悲劇が徹底的に追求されるのではなく、共同体のものとして引き受けられるように見える。

『オセロー』の原作と夢幻能版の優劣を論じることは、おそらく無意味であり、それぞれ別個の作品として見た方がよい。ここで注目したいのは、こうした異文化プロダクションの成否ではなく、このような例では文化に基づく状況モデルの個人主義と集合主義、衡平規範と共同体規範のような二項モデルが相

当有効であることである。実は、シェイクスピア演劇における異文化コンフリクト理解のための分析モデル構築を文化に基づく状況モデルに依拠することを選択した理由のひとつは、このモデルが特に東西文化の差異を分析するには適しているからであり、その点が上記の例からも確認できる。

- 3 ちなみに、実在のヘンリー五世は次のような人物であったと言われる。「1387-1422ランカスター朝第2代のイングランド王。在位1413-22年、ヘンリー4世の長子。軍事的才能と指導力に富み、先2代の対仏和平策を転換、フランス王位継承権の主張および膨大な対仏領土要求を掲げ、1415年百年戦争を再開、アジャンクールに大勝し、17年ノルマンディー征服に着手した。略奪および身代金目当ての在来型長征、遭遇戦戦術をやめ、攻城戦により約2年で征服を完了、植民に着手する、フランスの内紛に乗じブルゴーニュ公、フランス王妃と結びトロア条約(1420)によりフランス王女と婚約、摂政・王位継承者となる。南に逃れたフランス太子との戦争継続中に病没した。(以下省略)」(『世界大百科事典』, 平凡社, 1988年)。人柄と能力に関して、ヘンリー五世をどう評価するかは、言うまでもなく、人と時代により異なる。イギリス人の一般的な視点からは、フランス征服のほかに国内の数度のクーデターも鎮圧した彼は、高度のリーダーシップの持ち主として定評があり、志半ばで倒れた悲劇的な英雄ということになる。*Encyclopaedia Britannica Online*, September 10, 2005. 『ヘンリー五世』のコーラスで、“This Star of England (イングランドの星)” (5.2.398) であるヘンリー五世による栄光の統治もごく短い期間に終わり、生後9カ月のヘンリー六世が二重王国の統治者となったため、おぞましい暗黒時代が到来することを伝えているように、史実としては、ヘンリーとフランス王女との結婚によって英仏間の和平は永続することはなかった。ヘンリー五世は若死(1422年に35歳で死去)にをし、彼らの間に生まれたヘンリー六世の時代は戦乱の世となる。(後年、キャサリンはオーウェン・チューダーと再婚し、後のヘンリー七世を生むことになる。)
- 4 *King Henry V*, ed. T.W. Craik (The Arden Shakespeare, 3<sup>rd</sup> series; London: Routledge, 1995; Thomas Learning, 2001), pp.54-5参照。さらに、政略結婚でも、キャサリンが不幸になるとは言えないと主張する研究者もいる。B. J. Sokol and Mary Sokol, *Shakespeare, Law, and Marriage* (Cambridge: Cambridge UP, 2003), esp.p.39, p.196参照。元来王侯貴族の結婚はほとんど政略結婚であり、そういう結婚が首尾よくいくこともあることには同意できるだろう。
- 5 本論をとおして、作品からの引用は J.H.Walter, ed., *King Henry*, in *The Arden Shakespeare CD-ROM* (Surrey: Thomas Nelson, 1996) を使用する。
- 6 *King Henry V*, ed. Andrew Gurr (Updated edition; Cambridge: Cambridge UP, 2005), p.211, n181. ヘンリーが「愛」について語る時には、二人称単数がたいてい使用され、他の話題の場合には二人称複数に転じると指摘されている。
- 7 キャサリンのたどたどしい英語も、第5幕第2場では、喜劇的効果を高めている。征服者の言語の習得を余儀なくされる点が、特に今日のポストコロニアル批評の立場からは問題視されるかもしれないが、ヘンリーがフランス語を話そうとしていることによって相殺されるだろう。ノルマン人による征服以来、イ

ングランドの宮廷ではフランス語が話されていたことがあるので、ヘンリーのフランス語の方がキャサリンの英語よりうまいのは当然だとも言える。(ちなみに、ヘンリー五世がフランスの王位継承権を主張して開戦するように、ヘンリーとキャサリンを含めて英仏の王室(や貴族)は親族関係にある。時代を遡れば、この時代のイギリス王室はノルマン人の血統であり、同族とも言えるのである。)

- 8 Lance Wilcox は、フェミニズム批評の立場から、ヘンリーの求婚を強姦だと見なしている。*King Henry V*, ed. Gurr, p.59参照。